

—授業づくりの足跡— 小学校③グループ

平成 26 年 12 月 10 日

●授業内容についての提案

【単元】体づくり運動

- ・ 2 年生対象
- ・ 6 時間扱い（1～3 時間：知る、4～6 時間：広げる）
- ・ 体ほぐしの運動を帯状単元で行う。

4～6 時間目

ボールを宝物としてバランスをとりながらゴールまで運ぶゲーム

（例）マット・平均台・フープ・肋木・棒・ボールなどを用いる

- ・ 4 つの領域のうち、移動・バランス

(1) 低学年の「知る→広げる（工夫して運動する）」

- ・ 日頃から創意工夫を経験している児童であれば良いが、「知る→広げる」は難しいのではないかと危惧され、また、低学年に焦点を当てた場合、教師がある程度教える→児童が選ぶという段階が必要ではないかという意見がでた。
- ・ 児童は、マット等を使用する場合、運び方・並べ方を知ることができる。
- ・ 教師は、場の準備→道具や場の選び方が重要である。
という方向性で授業を組み立てていくことが決定された。

(2) 低学年の体づくり運動について、教材を選択していく視点

- ・ 基本的な感覚作り、多様な動きが必要である。
- ・ 非日常的な動きは、運動の楽しさを味わうことができる。

(3) 「人—モノ—他者」の関係、共存

自分一人で何かをするのではなく、友達と一緒に何かをやる。

関わりあいを大切に、単元目標を作成していく意見が出された。

少人数からクラス全体に広がっていくような関わり。

以下、体ほぐし運動の授業でどのように“広げる”のか、議論を行った。

●テーマ案（広げ方の方向性）について

- ・ 仲間と関わり合う、人とかかると楽しいという感覚の広がり。
- ・ 話し合いだけのかかわりだけでなく、身体接触を通じて相手のことを知る。
- ・ みんなでかかわり合う→全員とかかわることの満足感

- ・自分から広げ、かかわっていくこと。

→「かかわる」という定義が今後必要である。

- 「小学校1・2年生に味あわせたい体育の授業」をテーマに付箋を用いてアイデアを出し合った。



それぞれの意見から「小学校1・2年生に味あわせたい体育の授業」とは、運動の不得意に関係なくみんなが夢中になって楽しむことができる体育の授業観を基盤とし、それに連なり授業を楽しむ教師の姿勢が大切であることが導き出された。偶発的競争・模倣を交えた遊びや非日常的な動きの感覚を教材に取り入れることによって、そのような授業を作っていくことの重要性が示唆された。子どもたちは皮膚感覚のかかわり合いやコミュニケーションを通して、動くことのわくわく感・ドキドキ感を抱きながら学ぶことが3グループの目指すべき方向性だと決まった。

- 次回の全体会でのグループ会議に向けて

- ・鈴木直樹先生が作成した体づくり運動のDVDの資料を用いる。
- ・単元目標の決定
- ・子どもたちの実態把握
- ・次回のグループ会議

平成 26 年 12 月 26 日

テーマ：低学年の体づくり運動について—どのような教材を選択するべきか—

●前回の会議から

「かかわりあい」どのように捉えるか。

- ・剣道の教材をヒントに、“声を出すという動き”の活用
→自分をどのようにさらけ出すか、重要なポイントである。
- ・先生が“クラウン”になるかどうかという案
→教師は指示が声ではなく、文字や動きで！！
- ・「声を出して指示をだす」「声を出さないで指示を出す」ことの両立
- ・子どもたちが夢中になる・没頭するような授業
→アプローチは、さまざまである。

- ・先生が学習者の中に入り込み、指示を出しながら一緒に学ぶ、かかわり合い

子どもたちの休み時間後は、なぜあんなに賑やかなのか？

自由で、楽しいから→子どもたちの本能を引き出していくことが望ましい。

●本プロジェクトの目的

異質他者の力によって生まれた「これからの体育授業」を多様な指導形態によって提案をしていく。素晴らしい内容の授業を作るのではなく、教育委員会・学校・大学が三位一体となって、どのように授業を作っていくのか、そのプロセスや全員の変容が重要である。

<クラスの実態>

2年生—19名

友達同士仲が良く、子どもたちの「仲がいい関係」は一日一日変化していくといっても過言ではない。



グループの目指す方向性

「かかわり合いを重視した『体ほぐし運動』」

<子どもたちに学ばせたいこと>

- ・声を出す・声を出さない動き
- ・人数（グループ学習）の設定
→誰とでもグループを組み、かかわることができる楽しさ
- ・夢中になる運動→難易度の変化・ルールの変容など
- ・自然と体が温まる→導入の工夫（音楽の活用/鬼ごっこのような準備運動）

●今後の予定

- ・3時間扱い—3時間目 事前発表—2月3日（予定）
- ・単元の流れの設定

候補①；単元が進むにつれて、難易度が上がる授業。→道具の使用

候補②；研発表時のみ、上記の4つの視点を加える。

候補③；3回の授業で、上記の4つの視点を振り分ける。

平成27年1月27日

<テーマ：①指導案修正等 ②ビデオ内容の検討>

●指導案(事前配布資料)から

(1)設定

- ・単元計画…3時間
- ・本時(案)…めあての確認→準備運動→あんたがたどこさ→多様な動きの運動遊び(4つのステージ)→よい動きの紹介→だるまさんがころんだ→学習カード記入

(2)補足説明

- ・あんたがたどこさ(茂田案)…個人・ペア・多数でも可
- ・だるまさんがころんだ(越智案)…ボール(教師が扱う)が手から離れている間に、コーンの間を何往復できるか。4～5人グループで行う。
- ・多様な運動遊びのステージでは、「用具・転がる」のみを取り扱っている
- ・学習カードは、現時点では記入量多め
- ・あんたがたどこさ→多様な動き→だるまさんがころんだ の順番
- …体ほぐし→体づくり→体ほぐし、「みんなでこれから楽しむぞ」という雰囲気作りのための準備を考慮した順番
- ・人数の増やし方(候補)は、①単元の中で ②1時間の中で ③教材ごとの中で

●意見・修正案等

- ・「よいところ」⇒「よい動き」の方が良いのでは？
- …子どもにはわかりづらいかもしれない。子どもの動きに制限を持たせない目当てとは？
- ・「動きのノーベル賞」を設ける
- …みんなで見合う、作る(かかわり方の1つ)「かかわりがある」「面白い」
「やったことのない動き」など規準を設ける。
- ・だるまさんがころんだ→最初にもってくる
- ・友だちの動きを見たり聞いたりするだけでも、動きが全体でシンクロするだけでも、関わり合うことになるという意見
- ・子供にとっては「あそび」、その裏で教師が場や道具に仕掛けをしておくことが大切
- ・新しい動きを子どもが見つめていくことの限界→教師がある程度例示した後、自由に行わせるのがよいのでは。(制限の中での思考をさせ、ねらいとそれた動きが出にくくなる)
- ・「(次に)やってみたい動き」を見つけれたら、帽子を赤にかえるなどと設定する→自然に友だちのことも見られる
- ・準備運動を入れるか否か…児童の安全・責任を第一にとらえる現職の教員側と、準備運動は必要ないと考える学生側で討論した結果、準備体操の要素を取り入れただるまさんがころんだ(だるまさんの一日)に置き換えられることとなった

●変更点・決定事項

- ・グループのコンセプト「子どもたちをかかわり合わせたい」という願いから体づくり運動に単元設定がなされた旨を指導案に載せる。
- ・当日は用具(ボール)のみの使用に限定
- ・1人→ペア→3人以上→…→クラス全員という展開
- ・全7時間扱い。6/7に移動、7/7が用具を扱う
- ・学習カードは、より簡潔に<こんなことをくふうしたよ！>の欄は削除
- ・準備運動の代わりに、だるまさんの一日を取り入れる
- ・本時の流れ…めあての確認→だるまさんの一日→多様な動き(ボールのみ)→よい動きの紹介→学習カード記入
- ・動きのコンセプトの中には、自分自身の各部分・物と/または人と・人と各場面において、多くのレパートリーが存在している。(動きの「感じ」と「気づき」を大切にしたい体づくり運動の授業づくり 教育出版 細江文利・鈴木直樹・成家篤史 編 参照)

多様な動き	体のバランス	ターン ねじる 転がる バランス 運ぶ ジャンプと着地 伸ばす 縮める	直線に カーブして ジグザグに 大きく/小さく 遠く/近く 曲げて 縮めて 伸ばして ねじって 対象/非対称 上に/下に 接して/接さないで 近くで/遠くで 前に/後ろに ～に沿って/～を通り抜けて 近づいて/離れて 囲んで 回って 並んで・～と一緒に 先導して/従って 鏡に映すように/同じように 同じ調子で/対照的に	経路 (フロア/ 空間)	関係性
	用具の操作	投げる 捕る 集める 蹴る バント ドリブル 弾く ラケットで打つ 手で操作する用具 で打つ	物と/ または人 と	広がり	
			身体の 各部位	人と	

●今後の流れ

- ・ 藁先生が指導案を全員にリリースして下さいます。
- ・ このプロジェクトを通じてのご自身の変容の様子(最初はこう考えていたが、最後はこう考えるようになった等)や、過程での感想をお送りください。

*指導案、ビデオの提出メ切が1月末日となっておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

●今後に向けて

体育の授業を効果的に行うためには、教師は、授業を円滑に行うことが求められる。その為、教師は、子どもたちを実態把握し、適切な教授技術を選択していかなければならない。体育の主要な教師行動とは、マネジメント、直接的指導、巡視、相互作用としている。教師行動を観察することを通して調査し、分析する。また、授業内容以外の教師の授業の行動を計画し、実践し、観察し省察するというアクション・リサーチ的アプローチにより、よい体育授業を目指していく。

- ・ 体育授業における、教師の学習指導場面、認知的学習場面、運動学習場面、マネジメント場面に分けて、コーディングシートを用いて観察を行う。
- ① 体育の授業では、学習成果に直接つながらない時間が多いとされている。マネジメントを測定し、効果的に行うことは意義がある(例;ある活動から、ある活動に移るとき・用具や器具を準備するとき)授業全体の20%以下が望ましいとされている。
- ② 直接的指導(説明・演示)を頻繁にあるいは、長時間行くと、子どもの学習意欲を停滞させる。教師の介入の適否を知ることができる。
- ③ 子どもがグループで話し合ったり、学習カードに記入する時間を測定することで、思考・判断の時間を確保することができる。
- ④ 子どもの運動学習時間量を確保することは、学習成果を高める上で、重要な要素である。

(体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティックアセスメント— 明和出版 高橋健夫 編著 参照)

—授業づくりの足跡— 中学校グループ

授業づくりの足跡

体育科学習指導案

期間：第1回	平成27年1月9日（金）5校時
第2回	1月19日（月）6校時
第3回	1月26日（月）6校時
第4回	2月2日（月）4校時
第5回	2月9日（金）4校時

場所：東大和市立第一中学校

対象者：2E（女子17名）

授業者：坂本先生・鴨下

■単元 持久走（体づくり運動）

■単元目標

【関心・意欲・態度】

- ・共感的な態度で、仲間と関わり合いながら学ぼうとしている。
- ・自分に適した運動強度で運動に親しもうとしている。

【思考・判断】

- ・走っている時の体の感覚や状態と心拍数とのつながりに気づくことができる。

【知識・理解】

- ・心拍数と運動強度の関係についてわかる。
- ・ハートレートゾーンで分けられた運動強度の目的、運動の効果がわかる。

■単元について

今回の単元では、持久走を通して、自分の感じている体の感覚や状態と科学的に表示される体の状態（心拍数）を比べることで、自分の体の感覚をつかみ、動きを調整していく力を育もうとすることが大きな目標である。それを実現させるためのツールとして、心拍数が表示される「ハートレート」を用いた。生徒たちは、この単元の前に、長距離走を経験しており、タイムを縮めることや、一定のラップタイムで走ることを目指していた。しかし、今回の単元では、心拍数を指標にした生理的な一定ペースを保って走ることを目指している。生理的な一定ペースを保つために、走っている時の、「このくらいの速さ・つらさかな」といった体の感覚や、汗・呼吸・体温などの体の状態を感じとり、それによって、走ったり歩いたり時には止まったりしながら工夫し、運動の仕方を学んでほしい。

というのも、心拍数を指標にした生理的ペースには運動強度の高いものから低いものまであり、

それぞれの運動強度で適切な時間運動した時、その効果はさまざまである。この単元を、もっと長いスパンで見たとき、「生涯スポーツ」の観点から、将来的に自分の目的に合わせて運動強度を選択し、運動をおこなえるようにすることが最終的な目標としてあり、その基礎づくりとしてこの単元が位置づく。

また、持久走をおこなっていくなかで、体力を高めることだけでなく、「集団性」ということにも着目して単元を構想した。単元の目標として、自分の体の感覚や状態を指標にした、自分の体の“ものさし”的なものを作成していく。しかし、その“ものさし”は人それぞれ違うし、走っている時の他人の体の状態がどうなっているのかはわからない。それをハートレートが心拍数を数字であらわしてくれることで、自分の体の状態だけでなく他人の体の状態も見えるようにしてくれる。そして、他人の体の状態に興味を持つようになり、積極的にお互いの体の状態はどうなっていたかを話し合うことで、個人の学習にとどまらず、仲間との豊かなかかわりのなかで共感し合いながら、自分のものさしを作成していくような学習を進めていきたい。

■単元計画

時	題	目標
1	オリエンテーション	・ハートレートをつけて動いてみよう！
	＊単元の目標の確認 ＊自分の安静時心拍数の確認 ＊W-up ・ストレッチ ・グループで同じ動きをして心拍数を比べてみよう （自分の心拍数はどうなるか、また、他人の心拍数はどうなるか？） ＊時間走 ・150bpm以下で20分間走ってみよう。 ＊学習カード記入	
2	科学的に言う「がんばって走る」とは？	・“がんばって”走った時の心拍数がどうなっているかを知ろう。 ・他人の心拍数と比べてみよう。
	＊運動前5分間走 （ハートレートゾーンの青色のペースを保って） ＊800m走 ・“頑張って”走っていた時、自分の体はどのような状態になっているのかを知る。（ペアになり半周ごとの心拍数を記録し合う。） ・200mトラック4周と走り終わった後に歩いて1周し、運動後の心拍数の変化を見る。 ・“がんばって”は人によって違う。他の人の心拍数の変化も参考にしよう。 （＊運動後5分間走）	

	*学習カード記入 (お互いの記録を見合い・話し合いながら)	
3	自分の体のものさしづく り①	・生理的な一定ペースを保って走ろう。
	*フリーアップ *前時のコメントから本時のめあてを導出。 ・前時のコメントでは「ペースを一定に、ペースを落とす」というコメントが多かったが、そのペースはどのくらいのペースをさすのか？ ↓ ・物理的なペースと生理的なペース *10分間走 (ペア学習) ・1分間ごとの心拍数の変化を見る。 ・ハートレートゾーンの緑色を保って走る。(生理的な一定ペース) *学習カードの記入	
4	自分の体のものさしづく り②	・生理的な一定ペースを保って走ろう。
	*フリーアップ *10分間走 (ペア学習) ・時間ごとの心拍数の変化を見る ・個人個人で目指す運動強度を決めて、それに準じたハートレートゾーンを保つ一定のペースで走る。 ・おなじペースの人とペアを組む。 ・生理的な一定ペースで走るために、自分の体の感覚や状態を感じながら、走り方や歩き方を工夫してのぞむ。 *学習カードでの振り返り ・個人で決めた一定の生理的ペースで走るには、どんな走り方(歩き方)が必要だったかペアや、他の人と共有しながら話し合って振り返りをする。	
5	自分の体のものさしづく り③	・自分の体のものさしを完成させよう。
	*フリーアップ *時間走 ・今までの学習をもとにして、自らの体の感覚・状態と心拍数の変化を確かめながら、友達と楽しく走ろう。 *学習カードの記入 ・今まで蓄積してきた学習カードを見て学習のまとめをする。	

■単元の評価規準

【関心・意欲・態度】

- ・共感的な態度で、仲間と関わり合いながら学ぼうとした。
- ・自分に適した運動強度で運動に親しもうとした。

【思考・判断】

- ・走っている時の体の感覚や状態と心拍数とのつながりに気づくことができた。

【知識・理解】

- ・心拍数と運動強度の関係についてわかった。
- ・ハートレートゾーンで分けられた運動強度の目的、運動の効果がわかった。

第4節 公開研究発表会の取り組み

1. 研究発表会のチラシ

□＜公開研究発表会＞
チームでつくる
体育授業の実践

学校・大学・教育委員会の
三位一体の取り組みを通して

総合的な教師力向上のための調査研究事業
〈文部科学省受託研究〉

□アクションリサーチ的アプローチによる実践的力量的育成プログラムの開発□

日時□2015年2月10日(火)
□9:00~17:30□

会場□東大和市立第三小学校□

定員□100名□参加費□無料□

申込・問い合わせ□
□□□kyoushiryoku2015@gmail.com□まで□

□※会場の都合上、先着100名で締め切らせていただきます□
□※裏面の申し込み方法をご覧の上、メールにてお申し込みください。□
□※行政官、教員、研究者、学生など、誰でも参加が可能です。□

ごあいさつ□
□□□プロジェクトリーダー□
東京学芸大学□准教授□
鈴木□直樹□
□

文部科学省からの委託を受けて、東京学芸大学、東大和市教育委員会、東大和市立小中学校を中心として、学生、教員などで構成したチームを単位として、ディスカッションを通じてそれぞれの教師としての力量を育成する取り組みを続けてきました。そこで、この成果を授業公開という形で発表していくことになりました。ぜひ多くの方に参加していただき、「未来の体育教育・教員養成」の“あたらしいかたち”に触れていただければと思います。

主催：東京学芸大学□□共催：東大和市教育委員会□

～プログラム～

- 9:30~10:30 (受付は9:00~)
- 開会行事&プロジェクトの研究成果報告
- 10:40~11:25
- 授業実践① 5年生 体づくり運動
- (笠松具晃: 東京学芸大学附属小金井小学校)
- 11:30~12:15
- 授業実践② 1年生 体づくり運動
- (真野妙子: 東大和市立第三小学校 & 東京学芸大学の学生)
- 12:15~13:30 ランチョンセミナー (各分科会20名定員)
- A: 東京都の現職教員研修システム (石井卓之: 東大和市教育委員会)
- B: 学習指導論の「これまで」と「これから」 (成家篤史: 帝京大学)
- C: 体育授業へのICT導入入門
- 石塚諭: お茶の水女子大学附属小学校 & 鈴木直樹: 東京学芸大学
- 体づくり運動の授業づくりと学習評価
- 長坂祐哉: 東京学芸大学附属世田谷小学校
- 体育の授業改善に向けたヒント集 (学生のすぐれた研究の発表)
- ※ 講師の発表を手がかりに昼食を取りながら語り合います。
- ※ 昼食は各自でご準備下さい。
- 13:35~14:20
- 授業実践③ 2年生 体づくり運動 (養泰男: 東大和市立第三小学校)
- 14:30~16:30 全体会 & パネルディスカッション
- 研究発表の全体指導: 今関豊一 (国立教育政策研究所)
- パネルディスカッションのコーディネーター 鈴木直樹 (東京学芸大学)
- 16:30~16:45 閉会行事
- 16:45~17:30 懇親会&情報交換会
- ※懇親会にご参加の方は受付時に200円をお支払い下さい。
- ※茶菓を用意致しております。
- ※授業づくりやプロジェクトについての話し合いができればと思います。

パネルディスカッション
「先生たちに期待すること！」



今関 豊一
国立教育政策研究所 教育課程研究センター基礎研究部 部長

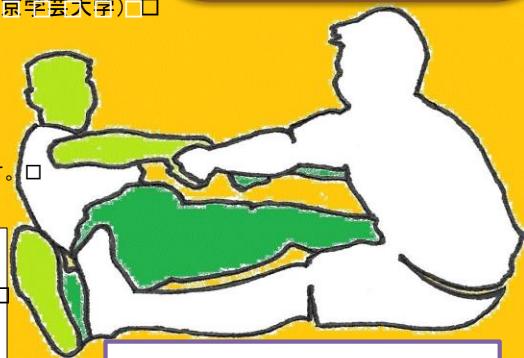


鮫島 明良
東京都小学校P内協議会 相談役



櫻井 眞治
東京学芸大学 准教授

パネリスト紹介



★見どころ★

- ① 新しい教員養成、現職教員研修の「かたち」を紹介します。
- ② 異質協働の力によって生まれた「これからの体育の授業」を多様な指導形態によって提案をします。
- ③ ランチョンセミナーでは最新の研究成果や実践成果を提供します。
- ④ パネルディスカッションでは、これからの「学び続けていく教師像」を考える機会を提供します。

～申込み方法～

メールに以下の情報を記載してください。

1氏名, 2所属, 3メールアドレス,

4ランチョンセミナーの第1~3希望,

5情報交換会への参加の有無

*ランチョンセミナーの参加分科会は事務局で調整させていただきます。

送付先: youshiryoku2015@gmail.com (事務局宛)



〒207-0011 東京都東大和市清原4-1312-2
TEL 042-561-2323

東大第3小へのアクセス

- ～電車～
- 西武拝島線 東大和市駅
- 西武新宿線 久米川駅
- ※ お車でのご来場はご遠慮下さい。
- ～バウ～
- 第三小学校前
- 東大和市駅より 久米川行き (5分)
- 久米川駅より 立川駅北口行き
- 立川駅より 久米川駅行き (30分)

会場付近には飲食店、コンビニエンスストアなど関連施設はございませんのでご了承ください。

@Sonoko fia rose

3. 公開研究会への参加者の声（アンケート）

【報告会について】

- ・授業前にどのようにして今日授業が作られてきたかが分かり、授業を見る視点が持て、見やすかったです。「チームで作る」という視点は、高齢化が進み、又、初任若手教員が増えている学校現場によい風を吹き込む一つの方向かと思います。この実践の成果を十分吟味して頂き、発信して頂ければ現場も助かると思います。
- ・学生さんと現場の先生方が協力して授業を造っていく過程がよく分かりました。
- ・プロジェクトの過程がよく分かった。
- ・充実した内容でした。
- ・研究の流れがわかった上で、授業参観ができ良かったと思う。三位一体の取組みの良さがよくわかりました。参考にさせていただきます。
- ・学生、教師、教育委員会の三者が共同で授業をつくっていく様子がよく分かりました。それぞれの立場で得るものがあり、すばらしい実践だと感じました。
- ・教師や大学教員、学生といった大勢の考えが時間をかけて練られており、とても参考になった。特に、学生という現場から離れたところの考えが入っていることがよいと感じた。しかし、プロジェクターの映像が速く流れ、資料もどこを見るとよいか分らなかったのもう少し時間をかけて見たかった。
- ・音楽入りの報告ビデオは、結婚披露宴の紹介ビデオのようで文科省委託発表とは思えないもので、これが学生が絡むということかと思いました。斬新です。
- ・横の関係になっていく事で学ぶことを忘れかけている教員も目を覚ますと思います。ぜひ継続して欲しいです。
- ・映像つきでよい実践報告をして頂きました。参考にできる部分を取り入れてみます。
- ・大学と現場が連携してより良いものを作り上げようと大変なご尽力をされてきたことが伝わってきましたが、映像の加工や音楽などが多用されていて、もっと簡潔で良かったと思います。結婚式のビデオレターのようなものでした。
- ・分かりやすいプレゼン資料で、授業構築の意図と過程がよく分かりました。三位一体の研究の凄さと素晴らしさが伝わってきました。
- ・プレゼンテーション（学生が作ったのでしょうか？）がよかった。授業までの裏側が見ることができた。学生・現職等がかかわることによって新規採用の際、新任教諭のレベルが上がる。おもしろい取組み！
- ・ビデオで過程を映したことに意義あり。
- ・音楽の音量が大きすぎました。熱い報告実践にやる気が伝わりました。
- ・それぞれの立場の人のプロジェクトに対しての感想が聞けて良かったが、BGMは歌詞が入っていない方が集中できます。
- ・教員、学生、教育委員会が協力して作り上げている内容を見てとても勉強になった。他人の視点というのは授業づくりの上でとても大切だと感じた。
- ・それぞれのグループの味が出ていてとても為になりました。
- ・それぞれのグループの取り組み状況が分かり、今日の公開授業を観察するためにも役に立った。
- ・授業計画への過程、思いなどが伝わり、授業を作る視点など学ぶことができた。
- ・映像を利用することで、とても理解しやすかった。

【ランチョンセミナーについて】

B

- ・教育の方針の移り変わりとその背景がよくわかりました。

C

- ・私は ICT のセミナーに参加させて頂きましたが、関心のある内容について食事をしながらというリラックスした雰囲気の中で情報を提供して頂き参考になりました。
- ・情報機器活用方法を知ることができ、今後の教育活動につなげたいと思いました。
- ・手間が少なく、かつ効果的な ICT の活用について知ることができて良かった。評価とそのフィードバックに活用していきたい。器械運動での活用については注意が必要だということは参考になった。“学校での学びは何か”という視点を忘れてはいけないと感じた。
- ・ICT 活用の方法（方向性）がよく分かりました。評価・課題提示・課題解決とあらゆる場面での可能性を感じました。活用してみたくになりました。
- ・勉強にはなりませんが、現場での活用にはお金という壁があります。
- ・様々な場面での活用が考えられる ICT だと思います。学校教育の場面で子ども達に「学びを深める」ためにも実践に取り入れていきたいです。
- ・学校にプロジェクターとネットワーク接続すらできない。iPad しかないのと同じことは実践不能ですが知識にはなりませんでした。
- ・お昼の時間も有効に情報交換・学習することができ、とてもおもしろい方法だと感じました。C コースでは「なるほど」と思うことがたくさんで。質問はできませんでした。
- ・ICT の研究内容、現場の声を聞くことができ参考になったが、鈴木先生、石塚先生に私の机にもきてほしかった。
- ・ICT という近代技術の内容を聞いて、これが使えれば生徒のマネジメントを減らし、運動強度を高めることができると感じた。
- ・ICT というなじみのない機械の想像をふくらませることができた。勉強になりました。

D

- ・D 部会でした。スラックラインの実践についての話はとても興味深かったです。ただ、ランチョンセミナー初体験でしたが、食べながら話を聞くという形式で、限られた人数で話をお聞きしているので、自分の出す音が気になってしまいました。
- ・もっとどの学校でも行えるような、簡単な道具を使った単元や実践がほしかった。
- ・実践を聞いてのお話だったので、非常に分かりやすかったです。知っている、聞いたことのあるということも再確認できたこともよかったです。ただ、質疑応答の時間が少なかったため、セミナーではなく食事をしながらの情報交換ができるとありがたかった。せっかく色々な先生方とお会いできたので。

E

- ・学芸大生の質の高さが伝わってきました。ただ、修論・卒論発表会のように…。現職には物足りなかった。
- ・C を選択したが、E になってしまった。学生さんたちの研究経過が聞けて良かった。SPSS を使った統計から考察をしていて良かった。その後、論文等に現職教諭の声や手立て等を入れると、チームとしての体育授業の実践につながるのでは…。

その他

- ・多くの実践を知ることができ、勉強になりました。
- ・みらいの体育教育というサブタイトルにふさわしく、大変良い刺激になりました。
- ・ちょっと食事をとりながらとは困った。互いに知らない中でいきなり食べずらい。
- ・もう少し時間があればと思います。三位一体ということで人数配置をすればより密な話し合いになると思います。
- ・現場の先生方や大学教員とかかわる貴重な機会であり、また、最先端の教育について知るよい機会となった。
- ・リラックスして聞くことができたのでよい学びとなりました。
- ・時間を有効に使って、学びを多くすることができよかった。

【授業公開について】

- ・報告の内容を実際の授業で見せて頂き、大変参考となりました。新たに考える観点も頂きました。
- ・どの授業でも子どもたちに多様な運動（遊び）に取り組ませ、良い動きを効果的に引き出し、互いに友だちの良さに気付かせていた点がとても印象的でした。今日のような授業展開でいかに子どもたちを見とって、良さを引き出していか自分の課題にしたいです。
- ・「体づくり」の授業実践を見ることができ、多くのアイデアを頂くことができました。
- ・より多くのことを考えさせられるきっかけとなりました。授業づくりに生かしていきます。
- ・大変お忙しい中、話し合いの時間をもち、授業をして頂いたことに感謝申し上げます。子ども達が活動を通して、また活動の中で何かに気づき、何を学んでいくのかがはっきりしなかったように感じた。
- ・三位一体の取り組みということで、色々な立場の人が関わって授業づくりをされたことは、新鮮で良い部分もあったと思います。しかし、思いが先走ってしまう危険性もあるのではないかと感じました。具体的には、5年生の体づくり運動の「トレーニング的になってしまっはいけない。」という思いは強く感じられたし、その通りだと思う。それにしても、「体力を高めるための」という部分の抑えがなさすぎた。これでは、多様な動きをつくる運動になってしまっていたと思う。指導要領ではっきりと「体力を高める運動」と示されているのだから、「意識的に体力を高める。」ということは外せないはず。さらに、年間計画や6年生の系統性を考えたとき、今回の単元計画でよかったのか疑問に残る。このように「思い」が暴走し、抑えるべき点をおさえられなかったり、全体を見たときに大きな隔たりが生まれてしまったりする危険性があるのではないかと感じた。見当違いの内容でしたら申し訳ありません。いろいろと考える良い機会になりました。ありがとうございました。
- ・ここまで体育の学習に関する取り組みごころうさまでした。ただ、校内での検討、学年での検討、他のクラスでの予備実践などがもっと必要だと思う。目標に対する課題解決ができていない。
- ・年度末の忙しい中、3つの授業展開は大変だったと思います。ありがとうございました。子どもたちが気付くまで待てずに与えてしまう場合が多いことが悩みです。また、体づくり運動の単元計画をどのようにしていけばよいか難しいです。
- ・子どもたちが動き（運動）をつくっていく姿が多く授業で見られ、素晴らしいなあと感じました。体育で何を学ばせるのか、体育での学びとは何かを考える機会をもらうことができました。ありがとうございました。
- ・導入、展開ですぐにでも取り入れたい内容がたくさんあった。特に準備運動の工夫や音楽を取り入れた動きは、見ていて楽しくとてもいい工夫だと感じた。授業中は、子どもの表情がとてもよく充実していると感じた。評価に対する点については難しいと思った。特に、思考判断を観察と発言だけで評価できたか。ワークシートにおいても、あの内容で評価ができるのかと個人的に感じた。毎授業を考えたときに、あそこまでたくさんの教師の目はない。今回の環境が特別すぎて通常授業でできる範囲から出すぎているのではと感じた（自動の実態に大きく関わると思うが）。
- ・授業づくりが、公開授業の場だけではないのはわかりますが、ビブスをつけている方が多くいらっしゃるわりに子どもとの接触が少なく感じました。特に5年生の授業では担任の立場がよくわかりませんでした。
- ・とても参考になりました。伝承遊びについては生活科などでも取り入れているので、体育との連合という形もとれば学校全体で学年を越えた取り組みも出来ると感じました。

- ・導入部で参考になるものが多かったです。主発のうち方、個⇔全体の使い分け、評価の仕方、全体の整合性など自分の授業を見直すきっかけとなりました。
- ・学習指導要領改訂以後の体育の授業を実際に体感できて良かったです。私自身が受けてこなかった授業の形式であり、想像にしかかったため、助かりました。
- ・中学校教員である自分にとっては、内容で参考になるものは少なかったです。しかし、教師の関わり方や姿勢、声かけなどの点では参考になりました。
- ・生徒の自発的態度を大切にしているのがよくわかる授業でした。
- ・1年生の授業は活気があり、どんな基本的な動きを身につけるのかということが明確になっていました。また、子どもたちの動きを工夫しようと新たな動きを発生させようとする姿が多々見られ、体つくりの理念がよく体现されていたかと思えます。最後の活動で、2人組・3人組のキャッチボールの仕方は提示しなくても発問で引き出せたかな？（さらに思考が充実させられたかな？）と思えます。2年の体つくりは、事前にどんな動きを身につけさせるのか、どのように発展（組み合わせ・複雑化）させるのか、しっかりと明確にして、体系化しておく必要があったかと思えます。
- ・時間の関係上の協議会がなかったのが残念！今回の授業では「何を学ぶ」のか（ねらい）を明確化し、そのねらい達成のための教師の手立てをはっきりさせたかった。指導案の中にもほしかった。子どもたちの授業の振り返りの中で、たくさんのよい意見が出ていた。その運動の本質とねる考え・意見があった。全体で共通理解・再試行したかった。
- ・3本共ためになった。学生さんがあだけいることで子どもが生き生きする。
- ・子どもたちが楽しそうに学習に取り組む姿がすばらしかった。
- ・子どもたちが、思っていたよりもボール操作ができていたと感じました。取り組みの成果ですね。1年→2年で技能的な高まりも感じられました。45分の中に準備片付けを取り入れているなど、体つくりをやってみようと思っている教員がすぐにまねできるように配慮されていると感じました。
- ・小学生の元気でかわいい姿が見れた。授業の組み立てがよく分かった。中高生の授業も見てみたいと思った。
- ・私自身、中・高の教員免許を所得しようとしているが、小学生の無邪気で元気な姿を見て、小学校もいいな、やりがいがあるなと思った。
- ・様々な実態に応じた工夫がされた授業で刺激になりました。
- ・1日に複数の授業が見れるため、良いと思いました。
- ・様々な授業実践を見ることができ、今後の自分の授業づくり、または教師としての在り方について考えることができた。
- ・現場の授業を客観視する機会があまりないので貴重な体験となりました。
- ・3つの授業を見せていただいて、教師になる上で大切なこと、授業をどのようにつくっていくかを学ぶことができました。
- ・授業者の選定や、授業づくりに関わったメンバーの授業ないでの関わり方を検討したいと感じました。
- ・検討してきたことを報告会や資料で知ってから授業を見ることで、ねらいを持って観察することができた。
- ・子どもの生き生きとした姿が印象的でした。ボールから派生する様々な動きや楽しさに十分触れることのできる授業だったと思えます。子どもの発想の豊かさに楽しませてもらいました。

【全体会について】

- ・パネルディスカッションは大変興味深く参加させて頂きました。学ばない教師は子どもの前に立ってはいけないとも思います。何を学ぶかは、その時期、その時の課題にもよると思いますが、目の前の子どもをよりよく変えて育てる力量を常に高めていく姿を求めています。
- ・今関先生の「コアな動き」についての話がとても勉強になりました。自分の授業の中で「全員に身につけさせたい力」をもっと意識していく必要があるように思いました。
- ・お話、有意義でしたがフロアにいる立場の人たちがもう少し関われるものだと嬉しいです。
- ・未来の教師像は、常に学び続けていかなければならないと感じました。
- ・今関先生のお話では、思考判断について、その気付きが限定的になるのではなく、子どもたちの多くがそうなるための場と環境を設定していく必要があるということ、櫻井先生のお話では、教師の学ぶ姿勢やその体勢、そして授業は子どもたちと共につくっていくということの大切さを改めて感じた。
- ・もっと授業に対する内容がほしかった。
- ・それぞれの立場でのお話が興味深かったです。
- ・教師の在り方・どう在るべきか、そして何を学ぶことが大切なのかを考える機会となりました。自分のこれからを考えることができ、とても有意義でした。ありがとうございました。
- ・体育授業に留まらず、理想の教師像やどういった力が必要かといった話は学校教育全般に適用されると思った。現場も見学したい。
- ・素晴らしい話を聞いてありがたかった。Pの代表として、鮫島先生のお話を聞いたことも新鮮だった。ただ、もっと授業内容についての話があるとよいと感じました。また、質問したいこともあったが、まとまらない内に時間が過ぎてしまったので、もう少し時間をとって頂けるとよかったです。
- ・勉強になりました。
- ・様々な考え方を聞くことができました。保護者がのぞむ体育への期待を感じ取る事ができ、参考にしたいと思います。
- ・みなさんがおっしゃった“理想の教師像”に少しでも近づけるよう頑張ります。
- ・様々な観点から教育を捉えることができて良かったです。学生であるため更に考えなければならないと感じました。
- ・今後の体育教員としての在り方として学び続ける教師像について様々な視点からのお話が聞いてとても有意義なものでした。
- ・様々な観点から話を聞くことができて良かったです。
- ・今関先生のお話は体系化されていて分かりやすい。内容、活動、能力という捉え方はしっくりきました。もう少しパネルディスカッションが統一されたテーマ・議論になればよかったです。少しバラバラだったような。
- ・発言したかったのですが、できずに残念！21世紀を生き抜く子ども・21世紀を築く子どもの育成を目指して、体育ができる21世紀学力をつけていきたい。今関先生と私の授業はかなりリンクしていた。「どうしたら勝てる」「どうしたら〇〇できる」と考え、自分で選択し、やってみる。→できる喜びを味わえる授業づくりを目指したい。学生と関われるコミュニティーを築きたい。
- ・3人の先生方、鈴木先生からたくさん学ぶことができたが、質疑応答の時間がもう少しほしかった。懇親会に期待です！
- ・貴重はお話が聞いてとても勉強になりました。また、これにより自分の中で様々な考えが芽生えました。
- ・今後について考えさせられる気付きのある場でした。
- ・幅広く話を聞いたので、良かったと思いました。
- ・立場の違う方々の話を聞くことができ、様々な考え方に触れることができた。
- ・様々な視点から教育・教師についてお話を聞くことができ勉強になりました。
- ・教師力の向上にとっても役に立つことが聞けました。
- ・様々な立場からの情報が聞いて有意義でした。
- ・自分はまだまだ学ぶという姿勢が足りなかったなと感じました。生徒のため、自分のためにも色々な学びの場に参加したいと思いました。

【その他】

- ・体育が実務教育の材料としての責任を果たすには、すべての先生方が体育の授業で一人一人の子どもを確かな力をつけることができることが大切だと思います。そんな先生方となっていただける学校でありたいと思います。本日はありがとうございました。
- ・とても寒かったので、体育館の暖房は大変ありがたかったのですが、音が大きくお話がよく聞こえないことがありました（やむを得ないとは思いますが・・・）。1つの授業研究会で3つも公開授業を参観させて頂けることなどなかなかないことです。貴重な勉強の機会をいただきありがとうございました。
- ・第2弾楽しみにしています。ありがとうございました。
- ・次回の開催を楽しみにしています。
- ・このプロジェクトは学生にとっても、教員にとっても非常に有意義だと思う。しかし、教育実習や各研究室でのゼミ、卒論に向けた研究などを経験していない学生が関わることには疑問がある。ある程度の知識や経験が基盤となり、授業について語り、現場の意見と研究の視点をぶつけることでよりよい授業が生まれてくるのではないかと思った。
- ・学校での今回の取り組み、運営に携わった方々、ありがとうございました。
- ・ありがとうございました。これをどのように全体に広めていくのかが私たちの課題だと思います。
- ・温風機はありがたいのですが、話されている内容が聞き取りづらかった方もいたので、マイクの音量を上げるなど工夫があればなお良いと思います。
- ・ストーブで会場を温めていただいてありがたかったが、マイクの音が聞き取りにくかった。
- ・現場を丸一日空けて来た甲斐があるかどうかは別として、今一度自分の教師力や未来に向けての目標などを考える大変良い機会となりました。ありがとうございました。
- ・これからの取り組みや目標について考えることができる良い機会でした。ありがとうございました。
- ・このような企画をぜひ広めて頂ければ・・・。私の研修先の埼玉大にはこのような考えがないので、ぜひやってほしいと思いました。羨ましい限りです。
- ・会場校のみなさん、関係者のみなさん、たくさん勉強させて頂きました。ありがとうございました。
- ・体づくりの評価について知りたかったです。どんなめあてを立てるのか、めあてから振り返りの流れにするには？今日はどうなったら A なのかなど。また、安全面でいくつか気になりました。相撲の時のやっている人と見ている人の位置。上靴、マットの出し入れなど。1・2年のボールの片付け方など。

第4章 研修参加者の感想録

東大和市教員

A

今回のプロジェクトでは、とても貴重な経験ができ、私自身成長できたのではないかと感じています。それは、このプロジェクトで行われた「教育について、様々な立場の方の講話」、「現場の教師、大学の学生、そして学生に指導する大学教員が共同で授業研究」というこの2つの取り組みがあったからこそだと感じています。

1つ目の「教育について、様々な立場の方の講話」では、ハウステンボスの地頭菌社長や、元プロサッカー選手で、現在大学准教授の菊原先生などから、教育とは違った視点から見た学校教育についてお話を伺うことができました。一般企業とは異なり、普段学校というくくりの中でしか生活することのない私にとって、企業経営やスポーツコーチング、テレビ番組制作といったお話は、新鮮な内容ばかりでとても刺激的でした。その中で、学校現場と共通していることは「人」を対象としている点で、相手を意識して、子供にとって何が必要なのかを考え、実践していくことが大切だということ学びました。

2つ目の「現場の教師、大学の学生、そして学生に指導する大学教員が共同で授業研究」では、当初それぞれの思いに差異があり、授業検討は全くと言ってよいほど進みませんでした。その原因は、現場の学生が大学で学んでいる理論と、学校で日々実践されている授業との違いによるものでした。しかし、みんなの思いは同じで、子供たちにより良い授業を届けることでした。考え方は違いますが目指すところは同じで、授業作りを行うに当たっては、考え方の違いはとても重要な役割を果たしたのではないかと感じます。最終的には、学生たちの体育で学習した運動を子供たちが休み時間に行っていけるような「伝承遊び」を教材とし、授業検討を行いました。子供たちの運動の日常化を目指し、何か使えそうな伝承遊びはないか探したり、それを実践したりする中で、授業検討がとても楽しくなってきました。私のクラスでも事前に「すもう」や「あんたがたどこさ」などを実践しましたが、子供たちからの評判もよく、授業検討で狙ったような学びが得られたり、休み時間に実践したりする様子も見られました。正直、体づくり運動の授業で私自身かなり迷っていた部分がありましたが、今後実践していける貴重な財産になったと思っています。

このプロジェクトを経験した中での私の最も大きな収穫は、1人では考え方や視野が狭くなってしまいがちですが、立場や考え方が異なる多くの人の意見を取り入れていくことの大切さです。共通の目的をもち、互いに協働していくことで、より良いものが作られると同時に、そこに関わった人たちが成長していけるのだと思います。小学校の現場において、子供たちに対して授業を行っていくのは担任です。日々の授業はどうしても担任の価値観や考え方に左右される部分が大きいです。今回学んだことを生かし、日々の授業作りでも職場の教員間で積極的に検討を重ねたり、一般企業などでの取り組みを参考にしたりと、様々な視点から授業作りについて考えていきたいと思っています。

B

今回のプロジェクトにおいて我々1グループは、学生の思いを生かした授業作りを目指した。学生には、授業作りに対する思いをもってもらうために、小学校の体育科の研究発表を見学してもらった。学生の感想は、「授業がトレーニング化しているように感じる。本来、運動の楽しさ味わいながら、自然と体力が高まっていくようにすべきではないのか。」というものだった。この言葉は、1グループが授業作りを進めていくうえでの指針となった。身に付けさせたいことに囚われすぎず、児童に運動の楽しさを味わわずことのできる授業となっているのかを基準として協議を進めることができた。

ある日の協議会では、参加した学生から協議会后にこのような意見をもらった。

「活動のアイデアが議論されていて、変化としての学習が語られていないような気がする。」

我々、教員としては、児童の気付きを大切に、どんなことを児童に気付かせるかをよく吟味したうえで、学習活動についての話し合いを進めているつもりであった。しかし、学習活動のアイデアが豊富に出て、協議会が活発になるにつれて、「児童に気付かせたいこと」を蔑ろにしていたのかもしれない。学生のこの言葉をきっかけに、今一度、「児童に気付かせたいことは何なのか。」「それを気付かせるための学習活動となっているのか。」を意識して授業作りへのぞむことできた。

学生から聞かされた二つの言葉。「どのように学ばせるか」「何を学ばせるか」どちらかに重きを置くのではなく、どちらも充実させたものにしなければならないということを再確認させられた。児童に学ばせたいことを吟味し、その学びに楽しさを見出せるように手立てを工夫していかななくてはならない。しかし、多くの場合は活動に重きを置いてしまいがちになる。体育科に限らず、どの授業においても、「どのように学ばせるか」ではなく「何を学ばせるか」を今一度、深慮しながら授業作りを行っていけるようにしたい。

今回のプロジェクトでは、学生や異校種の教員との授業作りを行うことで、以上のこと以外にも授業作りにおいての様々な視点に触れることができた。今まで自分がもっていた授業作りの視点とは違った視点に触れることができたということは、授業において児童を見取る視点が増えたことにもなる。今まで見えていなかった児童のよさを見取ることができるようになる。やはり、「自分の考えを客観的な視点で分析することができる。」

「違う考えに触れ、新たな発見をすることができる。」

このことこそが立場の違う人間と触れ合うことで得られる最大のメリットのように思える。

C

1 メンバー同士が互いの意見を尊重し合える雰囲気づくり

小学校③グループでは、学生の参加者数が教員に比べ少なく、はじめは教員の主張が強くなる傾向があった。また、学生が教員に対して、自分の思いや大学で学んだことなどを伝えることに躊躇する場面が見られた。

私は、全メンバーが安心して発言できる雰囲気をつくるために、学生と教員が対等な立場として関わり合い、全メンバーの思いや考えを授業づくりに生かすことを確認するなど、話合いのプロセスを大切にしました。

2 互いの考えの交流の促進

授業づくりについて活発に議論を進めるためには、まず、互いの考えや思いを知り合うことが重要であると考えた。発言を遠慮する参加者がいても、心理的負担を緩和しながら、個々の独自性を発揮しやすいブレインライティングを活用し、互いの考えを交流した。

《ブレインライティングについて》

アイデアをシートに書き込み、順次回して書き込まれたアイデアをヒントにしながら、さらに、アイデアを書き込んでいく手法。自由に発想して発言する雰囲気ではなかったり、発言が得意ではないメンバーがいたりする場合に有効。

3 成果と課題

○学生と教員という立場や価値観の違いを認め、公平の精神を大切にしたいチームとなることができた。

○一人一人が、チームに貢献できることについて主体的に考え、協力することができた。

○準備運動の必要性や取組方について、活発に議論するとともに、互いの意見を取り入れた「だるまさんの一日」というアイデアをチームでつくることができた。

●スケジュール調整が難しく、メンバー全員が集まることはできなかった。

●協議する時間を十分に確保することができなかった。

◎やらされるのではなく、自ら考え、つくり、動くという主体的な取組がメンバーの当事者意識を高めた。公開研究発表会で浮き彫りとなった授業づくりの課題が、次の行動のエネルギーとなっている。

D

「これは何に繋がるのだろうか？」と11月頃まで感じていました。三身一体とはいうけれど、1グループには教育委員会の方もいなく、学生も2人しか来ない。1ヶ月に一回の集まりや、毎週のグループ会議がとても気の重いものになっていた気がします。

年末に初めてS君、Nさんと話し合いの場を設けることができ、徐々に思いを共有することができてきました。年があけての「子ども達に何を身につけてほしいのか」という話し合いは、とても盛り上がり、学生さんの思いをたくさん聞くことができました。「子ども達の気付きを大切にしたい授業を作ろう」ということになりました。

1月の中旬の教材作りの頃に来た女性の学生さんには、もう少し早く来てくれれば、希望に沿った話し合いができたのではないかと感じています。その方は結局1回しか来ませんでした。来なくなってしまふ方がいることで、メンバーのモチベーションが下がってしまいました。

1月の中旬頃からはNさんやK君、大和の先生方、K先生のがんばりがすごかったので、私自身この取り組みを無駄にはしてはいけないと強く感じるようになりました。授業1週間前からは笠松先生に授業を行ってもらい、クラス子ども達と笠松先生の信頼関係が生まれてきました。子ども達との信頼関係が構築でき、PJのメンバーが本気で取り組めた授業だったので子ども達が楽しめたのだと思います。結果として私たちはよいメンバーに恵まれて、よい授業研究ができて満足しています。

これは要望ですが、PJメンバー全員に1～4グループの発表のデータを配ってもらい、取り組んだことを形として残せていけたらいいと思っています。ありがとうございました。

E

今回のプロジェクトを通して、学生と授業を考え、様々な教材の工夫やアイデアを知ることができた。特に、体づくりの授業では、リズム体操や動きの発展について話し合いを深めることができた。また、動きの内容をすべてカードに書くことで、わかりやすく且つ子どもが意欲的に取り組み、運動量の確保へ繋がった。鬼遊びでも子どもたちが意欲的に活動できるように、作戦を立てさせる時間をとったり戦術を共有できる時間をとったりした。そのため、得点を取るためにどのように動けばよいのかを考えさせることができた。

体育授業の教材研究ができ、とても勉強になりました。ありがとうございました。

また、運営を行ってくれた学生にとっても感謝しています。参加できない学生や教員のためにいつも議事録を作成してくれ、本当に助かりました。プロジェクトに対する学生たちの強い思いを感じました。その意欲にあと推され、教員たちもがんばることができたのだと思います。本当にお疲れ様でした。

東京学芸大学学生

1

研究発表を終えて、私たちの取組みを振り返る。すると、私たち3グループの特徴は、“雑草の如く”であった。主にグループ会議に参加するメンバーは教員経験が5年未満の東大和の先生数人と、大学生3人、教育委員会の先生1人だけであった。現職の先生方は、授業の行い方はわかれど、体育科教育の知識や考え方はないことを認め、それを会議の中で話題にする。学生は、少しは体育科教育の話はできたとしても、現場の先生方の意見は、新鮮であり、何より“先輩”としての教えとして聞こえる。学生の意見が通るように、そのような縦の関係を教育委員会の先生が壊してくれていた。つまり、私たちは、附属学校勤務や大学勤務経験、主任としてのキャリアを積んだ経験値、体育を熟知している人材がいななかで、雑草の如く活動していったことが読み取れた。本番の「体づくり」を考える過程において、“目の前のクラスに合ったいい授業”という正解はだれにもわからない。私たちの経験が指標になり、“目の前のクラスに合ったいい授業”という議論が進む一方で、アイデアや新発想は生まれてこない。混沌とした状態で、みんなの既存知識や経験で授業の内容を語っていた。目指す目標は“目の前のクラスに合ったいい授業”。休みの日の会議など、自分の時間を犠牲にしても“目の前のクラスに合ったいい授業”のコンセプトは変わらず、がむしゃらに考えていた記憶がよみがえる。今関先生が当日おっしゃったように、チームで何かをするときの各々の究極の成長は、「人」が変わることである。私たちのチームは、何もなく、何もわからないというところから這い上がり、自分のもっているものをすべて提供し、相手のいいところを吸収していく。そのように授業を作っていたのではないだろうか。その過程こそ、人間が変わっていったのだと照らし合わせることができる。今後は、お互いのいいところを吸収するという学習から、自分自身で知識や経験を深めていくための学びとして、転換していくことが課題である。

2

大学、教育委員会、学校が三位一体となり、体育授業を創造していくこのプロジェクトを通して、このようなプロジェクトがないと出会えない異質協同な他者とのかかわりを通して、自分自身も教師として、大学院生として成長することができたと思う。毎月の定例会の際には、異業種のプロフェッショナルの講師の方々から、現場に生かせるさまざまなアイディアの素をいただくことができた。保護者の立場、大学教授の立場、TV番組制作スタッフの立場などさまざまな分野から教育業界を見ることで、普段教師同士で話しているのでは見えていなかった問題や課題も見えてきたように思う。

授業づくりでは、小学校「体づくり運動」のグループに加わり、教育委員会、大学院生、大学生、現職の教員（東大和、学大附属小）が同じフラットな立場で授業について熱く話し合った。終わってみれば、異質協同な他者とのかかわりを通して、相互成長が見られたということであったが、最初はリーダーである大学生の参加がなく、それぞれが自分の主張や今までの授業実践、それぞれの授業観をただ出し合っていて、どの意見が良いか、意見をぶつけている感じであった。その状況を打破したのは、大学生であった。大学生が、東京都小学校体育研究会の体づくり運動の研究授業を参観に行き、その感想が、「自分が勉強してイメージしていた体づくり運動ではなかった」「単なる教師主導のトレーニングのよう

な授業であった」というものであった。私は教師生活が長く逆にそれが弊害になっているのか、そのような感想は持たなかったが、大学生の率直な感想を聞いて、その感性を授業で生かさない手はないと思った。その後の話し合いには、校務の関係でなかなか参加することが難しく、飛び飛びになってしまったが、参加する度に、大学生も自分の主張が言いやすい環境になり、現職の先生方も学生の意見に耳を傾け、意見をぶつけ合うというよりも、全員で「よりよい授業」を作り上げていくという感覚に変わっていった。当初は、大学生のためのプロジェクトであるという認識であったが、このプロジェクトを通して、大学生、大学院生、現職の教員みんなが、異質協同な他者とのかかわりを通して自己変容し、授業観が変わっていったと思う。

このようなプロジェクトに関われてよかったと思っているし、機会があれば、是非校種だけではなく、民間や違う職種などの人とも、一つの授業を作り上げていくというような取り組みをしていきたいと考えています。

3

私は大学で国語科に所属しています。高校まで部活は剣道をやっていたし、体育は好きでしたが得意というわけではなく、どちらかという自分が授業で足を引っ張る存在であるのだろうなという負い目からか苦手意識が少しありました。そんな中、誘って頂いたのがこの『総合的な教師力向上のための調査研究プロジェクト』でした。漠然と小学校教諭になったら、体育を教えなければならなくなる、苦手意識があるならば参加してまず損はないだろうという軽い気持ちで参加しました。しかし、実際に参加してみてまず思ったのは「もしかして場違いなところに来てしまったのでは」という不安でした。体育の指導案すらまだ書いたこともない自分が現職の先生方、体育科の先輩方に交じって授業を作り上げなければならないと知ったとき安易に参加してしまった自分を少し恨みました。碌にまともな意見を言えなかったからです。又、研究授業を参観して自分が考えていた授業作りとの差や、現職の先生方からの意見や実際の児童たちの様子などをぶつけられたとき、自分は体育について何も知らないからよく分からないという言葉で常に逃げていたと思います。でも何がきっかけというわけでもないのですが、確かに途中で自分の意識が変わったところがあります。よく分からないのならば、せめてたくさんの人の考え方や見方を吸収しようと思いました。幸い、現職の先生方、大学側の院生さん、学部生など、このプロジェクトには立場の違う人間が参加しているため、自分の中に何も意見や知識やないのならばそれをヒントに自分の考えを捻出していこうという気持ちで打ち合わせなどに臨んでいきました。普段の大学の授業ではあまり聞くことができないリアルな小学校現場の話は正直、新鮮でした。自主的参加のプロジェクトであったからこそ、現職の先生方も本音を垣間見せてくださったのではないかと考えると本当に貴重な人の縁であると思います。グループ内の話し合いにおいて、特に影響を受けたのは「児童の気づきを大切にしたい」という考えでした。もちろん、児童が興味を持てる楽しい授業は前提として、楽しさにプラスして「気づき」を持つことで、なぜこの学習をしているのかという児童が学習への意義を見出すのではと考えたからです。正直、そんなに深く考えず、体育の授業を私も受けてきたのですが、苦手でも嫌いにならなかったのは学習の意義と楽しさが感覚的でありながらもつながってからだと思います。体育に限らず、そこを伝えられると授業内だけに終わらない、日常に繋がる学習になるのだろうなと思いました。研究発表の後などで思わずこのプロジェクトが私に「畑違い」であったという言葉を出したのですが、今思うと不適切だったなと思います。「畑違い」というわけでは決してなくて、自分が何

を児童に伝えたくて、何をしたいかというのと、実際の児童の様子を照らし合わせ、学習指導要領との折り合いをつけながら探っていく過程はアプローチの仕方は違っていても、すべての教科に言えることです。小学校教諭はたくさんの教科を教えなければなりません。苦手意識を持つてはいられないのです。畑違いなどという区別をつけて敬遠しているのではなく飛び込んでみて、それでも分からなかったらたくさんの人と意見をぶつけ、擦り合わせながら、自分の考えを見付けて形にしていくことが重要なのではないかとこのプロジェクトを通して考えました。大学にこもっていたら決して学べない、貴重な経験ができたと思います。今後の学び、実習に活かしていきたいです。

4

○中学校グループでの授業づくり

私は中学校グループに参加させていただきました。しかし、授業実践がおこなわれた東大和第一中学校は勤務地と距離があり、実際の授業に足を運べないというかなり厳しい条件で関わることになりました。そこで、授業映像や授業者の語りから生徒たちの思いを推察し、単元の目標を絶えず修正していく議論を中心に関わらせていただきました。

中学校グループでは、体づくり運動の持久走の授業づくりに取り組みました。授業者は主として学部4年生であるK先生が担当し、その補助役として東大和第一中学校のS先生が授業に介入しました。メンバーとの議論をとおして単元が構想される中で、ハートレートモニター(H7心拍センサー:Polar社製)を使用すること、そして、個人的な運動である持久走に集団性をもたせることの二つが授業の柱として設定されました。

グループメンバーから見た教師の変容

大変僭越ではございますが、ここからは本プロジェクトの趣旨に則り、K・S両先生が教師としてどのように変容していったのかを私の目線から述べさせていただきます。K先生は持久走をとおして、生徒たちに自分の体の“ものさし”を創り出すことを目指しました。しかし、この“ものさし”は人それぞれ異なり、走っている時の他者の状態がどうなっているのかはわかりません。それを克服するツールとしてハートレートモニターを活用し、お互いの状態を話し合い、共感し合いながら、自分の“ものさし”を作成していくような学習を企図していたのです。ところが、単元が進む中で、いつの間にか「走り方による心拍数の変化の仕方を知ること」に目的がすり替わっていました。おそらく、心拍数が視覚化されることによって、生徒たちが数値の変化に対して一喜一憂する姿を目の当たりにし、ハートレートモニターの活用方法に興味に移り変わっていったからではないでしょうか。一人で授業をつくると、このようなことは起こりがちですが、K先生はメンバーからの指摘を素直に受け止め、速やかに修正案を提示してくださいました。

次に、S先生の変容について述べたいと思います。S先生はこれまで陸上競技の長距離走の授業には取り組まれたことがあるものの、体づくり運動の持久走は実践されておりました。確かに長距離走で生徒が直向きに走る姿は、教師として心動かされるものがあると感じるのは一教員として大いに共感します。とはいえ、今回の持久走はK先生が提示したように、自分たちの体の状態を感じたり、気づいたりすることが目的であり、陸上競技的に長い距離を走るだけでは味わえないことは明らかです。そのため、S先生の持つ教材観は大きく揺さぶられたのではないのでしょうか。ご自身の振り返りの中で「ハートレートモニターのように新しい物を使うことだけでなく、新しい考え方をまなぶことができた」と語

られたことから、その様子がうかがえたと言えるでしょう。

K・S 両先生は共に、卒論あるいは入試業務で忙しい時期であるにも関わらず、メンバーとの議論の場に積極的な参加をされていたことが大変印象に残っています。そういったお二人の姿を目の当たりにし、教師の成長が促される前提として教師自身が他者と学び続けることの重要性を強く感じました。それと同時に、その過程における共に学ぶ他者は教師の成長に欠かせないものであると実感しました。学びの機会を与えてくださった K・S 両先生をはじめ、中学校グループの皆様には感謝申し上げます。ありがとうございました。

5

○プロジェクトを通じて学んだこと

大学の先生、教育委員会の方、現職の先生方、学生などの多様な立場から、それぞれの主張を聞くことができ、とても良い経験になりました。現場の先生の授業作りの視点についてはもちろん、「(子どもの怪我・事故に対する責任の重さから) 準備運動だけは外せない！」という現場の事情についても教えていただいたことが印象に残っています。現場の先生方の生の声は、普段大学で講義を受けているだけではなかなか知る機会のないことなので、このプロジェクトは大学での学びにより切実性を感じるきっかけにもなりました。それと同時に、大学で学んでいる通りの事実を現場の先生から聞くことで、いま学んでいることに自信をもつこともできました。

グループメンバーについては、話し合いを進める上で大学生・大学院生と現職の先生方との対立を避けるために、教育委員会の方や現職に就きながら大学院で学んでいる方がメンバーに入っていること、お互いの話を否定するだけでなく相手の主張を聞き入れるという姿勢が大切だと感じました。また、違う立場の人間が集まるということは時間的にも難しいため、お互いの事情を考慮しあって建設的な取り組みをしていく、或いはインターネット上で話し合いができるような体制を早期に整えておくことが重要であると感じました。

○グループ会議から

低学年の体づくり運動について話し合いを進めてきました。「かかわりあい」を味わわせたいという願いから、単元目標は、他者と一緒に何かをやることの楽しさを味わわせることになりました。子どもの身の回りの環境や、友だち同士の仲が良い関係は日々変化するということを踏まえ、授業の中では「誰とでもかかわりあえる楽しさ」をテーマに、友だちと2人組で活動に取り組んだり、クラス全員で一つのことに取り組むなどの活動を取り入れました。

授業についてグループで話し合っていく中で、運動には子ども自身(自己)とモノ、他者の三者間の関係があること、その皮膚感覚や会話によるコミュニケーションなどの「かかわり」が運動の楽しさなのではないかという新しい考えを持つこともできました。

話し合いの中では、偶発的な競争や模倣を交えた遊びや非日常的な動きの感覚を教材に取り入れること、教師の役割として低学年においては特に多様な動きを味わえる場や教具の設定が大切になることも導出されました。当日、2年生は大勢が見守る緊張感の中とても楽しそうに授業に参加していたように思います。対象の学年が上がった時にも、運動の得意・不得意に関係なく、教師を含めた全員が本気で夢中になって楽しむことができる体育の授業を構想できるようになりたいと感じました。

6

私は、このプロジェクトに関わるにあたり、経験として、小学校の先生方と関わるのが、教育実習のみであったので、先生方とのかかわり方がどうしても受け身になってしまいがちでした。しかし、最初の全体会でプロジェクトリーダーである鈴木直樹先生から、どのメンバーも積極的に意見を出し合い、協同的な授業づくりをというコンセプトを聞いていた私は、この自分の状況ではいけないと思いました。しかし、なかなかグループでの話し合いでは、自分の思っていることを言えない状況でありました。しかし、第3回目の話し合いの時に、教育委員会の石井先生や、現職の先生方が、「どう思う？」と意見をどんどん聞いてくださりました。このことを皮切りに、私も他の学生メンバーも、少しずつ自分の思うことを話し合うことができるようになってきました。2月の研究発表に向けて授業を考えている際、「子どもたちがこの単元を通して学んでいることは何なのか」という「学習内容」を巡って、2時間にも及ぶ議論がなされたこともありました。その際、低学年の体づくり運動は「多様な運動遊びを経験すること」なのか、「自分でおもしろい運動遊びを生成していくことなのか」ということで割れて、厳しい意見が多く出たことが、今でも鮮明に覚えています。

しかし、その厳しい関係を乗り越えて、互いによりよい授業を創るために話し合う姿は、すごく貴重な体験になりました。自分が子どもたちのために、いろいろな立場の方々と一緒になって話し合う時間が、学生の立場で経験できたというのは、これからは必ずつながっていくと思っています。

また、私は、小学校2グループのグループリーダーとして、関わらせていただきました。私自身、こうした「プロジェクト」というのに関わることも初めてであり、さらに、学校の先生や、教育委員会の方などがいる中で、私がリーダーなど務められるのだろうかという不安ばかりが募りましたが、先生方は、いつも「何か困っていることは無いか。」「次は、こういう連絡を回してくれると助かる。」と、助言をしていただきながら、僕をサポートしていただいたことは、とても感謝しています。また、同時に少しずつ、リーダーとして、話し合いを進めたり、連絡を回したりすることが出来るようになってきて、異質な立場の方々と、授業を進める中で、リーダーシップを発揮していくという、学校現場や社会で必要なことや貴重な体験をさせていただくことが出来ました。

私が、このプロジェクトに関わることなく、このまま教職についていると思うと、このプロジェクトで味わったような葛藤や、苦しみを味わうことになるのだと感じるのかなと思いました。しかし、これらの経験が、学生のうちに体験できたことで、今の学校の現状と、学生の知識との差異が理解でき、さらによりよい体育授業とは何なのかということについて、深く考えるようになりました。このプロジェクトのような取り組みが、大学のカリキュラムに取り入れられ、多くの学生が、「学び続ける」姿勢を持った上で教員へと変わっていくことが出来れば、すごいことになるなと感じました。改めて、このプロジェクトに誘っていただいた鈴木直樹先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

おわりに

理想は理想のまま終わってしまうのではないか・・・そんな心配を何度したことでしょうか？

第1回目の研修会が実施された8月。現職の先生たちは学生達を指導するという思いで参加していたように思います。一方で、対等な関係で関わり合いながら授業を創ると考えてきた参加した学生は、そんな雰囲気負けて自分を出せずにいたように思います。教員同士でも考え方の違いなど、受け入れられないという状況でスタートしたのが、8月でした。最初の3ヶ月は、停滞して前に進んでいないというように感じました。

印象的だったのは、最初の全体会で「何をやればいいんですか？」と質問されたことでした。いわば、作業部会のように考えていたことがこの言葉から読み取れます。この質問に対して私は、その答えをグループで見つけていくことがこのプロジェクトですと回答しました。さぞかし、先生たちには負担の重い研究プロジェクトだと感じられたことと察します。

しかし、それから月日が経ち、公開発表会の日のことです。例外になく、終わった後はみんなで懇親会でした。盛会だった発表会に満足して私も大変よい気分でした。そして、二次会に行こうと誘ったところ、なんと残ったのは石井先生他数名でした・・・。他の人はグループで二次会となり、それぞれ分散したようです。なかには「一年に一回は同窓会をしよう」という声も・・・いつの間にか、仲の良いグループがそこにはありました。体育授業を創るということを中心にチームがまとまったことを感じた瞬間でした。

この報告書には掲載できませんでしたが、各グループが作成した学びの歩みをまとめたビデオは見てみると涙が出てきます。そこに流れるBGMもそんな思いを引き出してくれます。

今は本当にこのプロジェクトをやってよかったと心から思えます。そして、次は第2ステージに立ちたいと思います

平成27年3月

プロジェクト代表 鈴木直樹